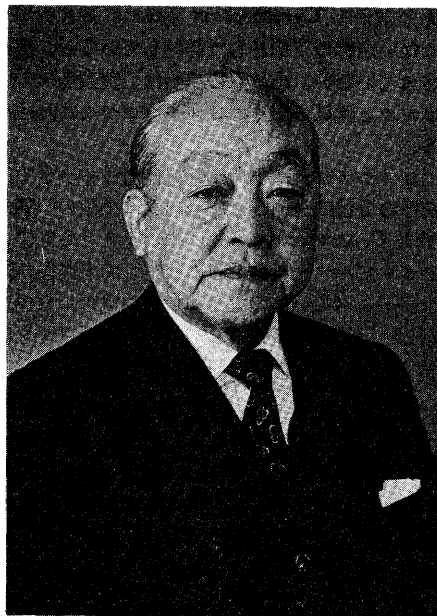


○6代目武田長兵衛氏の植物学への貢献（小林義雄） Yosio KOBAYASI: Contribution to the botany by the late Mr. Chôbei Takeda

武田薬品工業株式会社の武田長兵衛会長は昭和55年9月1日に急性心不全のため急逝された。哀悼の念に耐えない。氏が日本の薬業界、財界への貢献は申すまでもなく、文化面に及ぼした影響も多大なものがあり、例えばすぐれた学者、学術団体への援助、海外子弟の留学促進などを実行せられた。しかしここでは日本の植物学への貢献を回想して氏を追慕したい。

氏は明治38年4月29日に現在本社のある大阪道修町で5代目の長男鋭太郎として生れ、慶応大学卒業後、イギリスのOxford大学に学び、英国紳士としての風格を身につけた。さて5代目長兵衛（和敬と称す）の文化事業への貢献は絶大なもので朝比奈泰彦博士の意向を承けて植物文献刊行会をつくり稀観書を出版し、シーボルト・ツッカーニのFlora Japonicaをはじめとして10冊ほどを相次いで世に送った。5代目は戦時中の昭和18年に隠居、鋭太郎氏が改めてあとを継ぎ6代目となった。敗戦の色濃い時代から戦後の荒廃時代に会社の再建に努力するとともに文化事業も続けられたことは並々ならぬ骨折りであったことと思う。戦時中に発足した航空醸酵研究所を翌年に中沢亮治博士の見解を容れ財団法人発酵研究所として再発足させ薬品工業の研究所内に置き、優秀な研究者に比較的自由な菌類研究を行わせ、ここで菌株保存事業を行い、その量と信用度は日本随一であるのみでなく、世界でも1～2を争うものになっている。京都の修学院離宮のそば、比叡山の四明嶽を望む景勝の地に薬草園を設け、製薬に必要なもの以外でも著名な草木を集め分類花壇式に並べ、同所に多くの椿の品種を集め、或は洋蘭を栽培して、この方面の研究に貢献された。十三の研究所の傍らに別館を設けて杏雨書屋とし、和漢洋の本草書を集め、日本有数のコレクションにした。そして散逸を防ぐため持出し厳禁、入館者も制限した。科学博物館に笹岡久彦氏の薔苔標本が入ったのも朝比奈泰彦博士の進言を容れられたからである。また学者や学術団体への援助も先代に引続いて実行して来られた。私が



故 武田長兵衛氏

1963年以来、海外調査を行うことが出来たのも社長の了解の許に重役の三宅馨博士が決定されたからである。斯様に有能な多くの重役を傘下に集めることが出来たのも武田氏の人を見る明と徳があったからであろう。昭和46年に創業 190 周年を記念して薬用植物画譜という豪華な書物が出版された。氏が尊敬した刈米達夫博士と氏の友人小磯良平画伯が協力してつくり上げたもので、仲々美術画の画材になし難いブクリョウやマクリなども美しい姿で画かれている。昨今日本では薬業界に対する風当たりが強く、また春には将来を嘱望して居られた御長男を失い、それらの心労が死期を早めたのかも知れない。武田薬品創立 200 年を目の前にしての不幸であった。ここに謹しんで御冥福を祈る次第である。

○高等植物分布資料 Material for the distribution of vascular plants in Japan.

102 ヒメチゴザサ *Cyrtococcum patens* A. Camus 小笠原諸島の植物について調査研究されて居られる林業試験場の豊田武司氏から、同氏が昭和54年1月2日、父島の初寝山から中央山の間で採集された、イネ科植物の同定を依頼された。

初寝山附近は一般に昔から住居のなかった地域であり、小川および湿地を含む低い地域と共に本来の植生が殆んど破壊を免がれて残っている植物の宝庫だと言われている。ミクロネシア・琉球・台湾・中国大陆およびフィリピンの標本と比較して旧熱帯に広く分布する *Cyrtococcum patens* ヒメチゴザサであることが分った。余り乾燥がひどくない森林の下草として群生しているが、穂がおもに秋冬にかけて出るためか今迄報告されていない。小笠原の植物は硫黄列島・ミクロネシア・琉球・台湾・フィリピンのフロラと関係が深く、ヒメチゴザサもこれらの地域に共通して分布する種類の一つである。

ヒメチゴザサは小穂が紫褐色でやや小さく、葉鞘の長さはほとんどが 2 cm 内外で、花序の分枝は長いやや上向きに小数の小穂がつき、葉は小さいので、ヒロハヒメチゴザサ *C. accrescens* Stapf や、ミクロネシア・中国南部・フィリピン・マレーシア・タイ・ビルマ・インド等に分布して小穂柄の短い *C. oxyphyllum* Stapf と区別できる。水牛が食べているのを台湾で見かけたことがある。この標本の発見で小笠原の植物相に新しい記録として属のレベルでヒメチゴザサ属 *Cyrtococcum* が加えられることになる。

(玉川大学、許 建昌)

□生物学御研究所：伊豆須崎の植物 (Flora Suzakiensis) 266 pp. 64 pls. 1980. 保戸社、大坂。¥6,000. 陛下の伊豆須崎御用邸を中心としたフロラである。那須に次ぐフロラで、大体それと同じ体裁になっている。この須崎は南伊豆で高知の足摺岬に似た点が多いし、またウィリアムズとモロウとが日本ではじめて採集した下田に近く、昭和50年御訪米の際にタイプの標本類を親しく調査されたと記しておられる。

地質や気象、沿革、植生、分布上の特徴、研究史上注目すべき種類（イズアサツキ、イズドコロ、シモダガシオオイ、ソナレセンブリ）については和英両文で記されている。